

無想録 九

終始一貫

終始一貫ということばは美しい。

しかし人間はただことばを持つていただけではないか。

「初めは手でしたことを後には足でする。」

これが常人の世界のありさまである。

後に足でするぐらいならば、初めから足ですればいいはずだ。だが、そうはいかないのが人間である。

初めは泣いて誓った者も、最後のどたん場になつて、利益や損害になると態度を変えらる。

五年、六年、十年と同一の姿で一貫することは困難である。

時たま、至誠一貫の人があれば、この人はきつと何ものか持った人である。

人間は強い

私のある日の日誌には次のように書いてある。

「人間は弱いものだ。」そうした結論を握った人の心――

そうだ、人は確かに弱い。だが、人間は弱いか。人間が弱ければ何が強いのだ。いったい何が強いのか。人間が強くなって何が強いのだ。神というも仏というも、人間の生活をおいてほかに、そのどこに力を示すのだ。天を地に、地を天に、海をさき、大地をくぐるも人間ではないか。「人間は強い」その結論を得るために俺は生きているのだ。「人間は弱い」その結論は、努力精進なくとも、人間群落の中に見出される。「人間は強い」それを人の上に成就し、われの上に成就する。そこにのみ生活の意義はある。認識が問題になるのも、宗教、哲学が生まれるのも、真の強者のためのゆえではなかったか。「人間は弱い」その結論をひきやぶれ！ 汝の生活に真の強さを立証せよ。奇跡を生むものは人間である。

正義漢

原敬氏毒刃に斃^{たお}され、浜口雄幸氏やられ、今また前蔵相井上準之助氏撃たれる。暗殺の国日本！ 頭の簡単な正義漢、この愚拳をくり返す。もつと賢くなれ日本人、政治発達の上に憂慮すべき現象、この蛮風やまずして正しき明るき政治ありや、一人の簡単な正義意識から代表的人物を殺す人間の国に。

このまま

真宗の同行に限つて「このまままいられる」とくり返す。努力精進を通さざる、このままに何の意義があるか。長い間、この間違われたる教育を受けし宗教人は悲惨である。自力を否定しつくしたる仏凡一体の境、生死涅槃一如の境、不断煩惱得涅槃の妙境は、そのまますら超えたるそのままである。至り得たる人少し。

伝統と理想

民族の伝統を尊び、因襲を去って、人間開放の理想を伝統の上に生かさんとする運動、世界的におこる。因襲滅ぼすべし。伝統尊ぶべし。しかして大理想を生かすべし。文化を消化すべし。とつてつけたような翻訳時代去る。日本における過去の新しい運動は常に天皇への復帰によつてなされた。昭和の日本よ、天皇にかえれ！「官武一途庶民ニ至ルマデ各ソノ志ヲトゲ人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス。」ちまた巷に飢餓の声あふれる。為政者よ、いな民族よ、天皇の心を徹底せしめよ。大御心おおみこころより遠ざかる日、国危し。

愛欲か名利か

愛欲に冷淡にして名利に強き人、仏道を得たるがごとし。独善にとじこもつて、善人顔なるもの釈尊の信境より遠し。愛欲、名利、物欲を超えて、久遠の仏心に直入する者に至つてはすくなし。聖人の本願海、大乘菩薩道の真髓に至つては極難信なるかな。愛欲に居り、名利、物欲を満たしつつ、しかもそれを超ゆ。超えるとは、消滅にあらず。

道草

強き者は英雄主義となり、弱きものは感傷の涙の谷に沈没する。
如来の願心に生きるとは、英雄主義的興奮にもあらず、涙の谷の甘露にもあらず。

あきらめ

つらいことに出合った時、自分よりも不幸の人を見てあきらめるといふ人がある。道徳的にはいいことかも知れぬ。
しかし仏教の真髓を生きるのとは、だいぶんの差がある。

破和合僧

身の行いのふしだらな説教師が、高座の上から、「坊主の悪口を言う者は、五逆の一つ『和合僧を破る』地獄の重罪というものじゃ」と啖たんか呵をきつた。さめた聴衆たちは、厚かましいこの僧侶を笑つた。

師教

實際寺の慶沢和尚から聞く。道元禪師のみ教えにいわく

「無上菩提を演説する師に会わんには、

種姓を感ずることなかれ

容顔を見ることなかれ

非を嫌ふことなかれ

行ひを考ふることなかれ

ただ、般若を尊重するが故に、日々三時に礼拝し、恭敬して、更に患悩の心を生ぜしむることなかれ。」と。

説く者の世界、聞く者の心得、そのどちらにも道がある。道元の教訓は、非道な教役者の自己弁護、または、自己の地位利用のための材料ではない。師教に忠実なるべき仏徒の態度である。

梅

冬例年よりも温し。

すでに山奥に梅かおる。総選挙、支那事変をよそに、谷間に梅かおる。人は時にこの梅と語るを要す。